

過疎地域における高校運動部の位置づけ －世羅高校陸上競技部の事例－

和田 崇

Positioning of High-School Athletic Clubs in Depopulated Areas: A Case Study of Sera High School Track and Field Club

Takashi WADA

I はじめに

本稿は、スポーツの地理学および教育の地理学の観点から、日本の高校運動部と地域社会の機能的結びつきの実態を把握し、地域における高校運動部の位置づけを明らかにすることを目的に起稿するものである。

スポーツの地理学的研究は1970年代から欧米を中心に行われるようになり、これまでスポーツ活動の伝播や地域差、選手の空間的移動、スポーツ文化景観、スポーツが都市・地域にもたらす経済的・社会的効果などが解明されてきた (Bale, 2003; McGowin, 2010)。このうち経済的・社会的効果に関する研究には学校スポーツを取り上げたものがあり、すぐれた競技成績が住民の地域に対する愛着と誇りを高めたり、他地域からの注目を集めたりすることが報告されてきた (Rooney, 1974; Rooney and Pillsbury, 1992)。日本でも、学校スポーツは学力・進路保障および多様な人間関係とともに学校魅力の1つとみなされ (樋田, 2016)、その活躍が地域社会に活力をもたらすことが示されてきた (岩月, 2019; 新堀, 1973)。

一方で、教育の地理学的アプローチについては、斎藤 (1975) が学校教育を文化継承の1形態とみなし、文化地理的アプローチの必要性を、また川田 (1994) は教育が社会的な空間編成や地域格差の再生産に及ぼす影響に着目し、社会地理学的アプローチの必要性を提起した。これに対して酒川 (1998, 2004) は、地域社会における学校の拠点性に着目し、学校と地域社会の機能的結びつきを解明する必要性を提起した。これに関して、日本では近年、学校と地域社会の結びつきを強化し、学校の魅力を向上させようという動きが広がっている (小粥, 2017; 樋田, 2016; 樋田・樋田, 2018; 宮口ほか, 2014)。

以上から、高校運動部と地域社会の関係を捉えることは、スポーツが地域社会に及ぼす影響を明らかにしようとするスポーツの地理学的研究にとっても、学校と地域社会の機能的結びつきの把握・分析をアプローチの1つとする教育の地理学的研究にとっても有意義だと考えられる。そこで本稿では、1) 高校運動部と地域社会がどのような連携・協力関係を構築しているか、2) 高校運動部の存在や活躍が地域社会にどのような精神的・社会的効果をもたらしたか、3) 高校運

動部が学校の魅力や地域活性化の手段となり得ているか、という3つの視点からアプローチする。この点について、筆者はすでに高千穂高校剣道部の事例研究を通じて、特定の運動部の活躍とそれへの支援が過疎地域の学校の魅力向上と地域活性化の有効な手段になりうることを示した(和田, 2021)。しかし、そこで示されたのは1運動部の実態のみであり、その課題を検討するには条件の異なる事例の分析を積み重ね、知見を蓄積することが必要である。そこで本稿は、高千穂高校剣道部とは競技種目が異なる高校運動部を事例に取り上げ、詳細な実態分析を行うこととする。

本稿の研究対象校は、高千穂高校と同じく、人口および生徒数の減少により学校存続が懸念される中で地域社会と連携・協力した学校の魅力づくりが要請される過疎地域¹⁾の公立高校とする。また、分析対象とする運動部は、高千穂高校剣道部と同様、全国大会で長年にわたって好成績を上げていて、全国的にも知名度が高い運動部とする。以上の考え方から本稿が分析対象として取り上げたのが、広島県世羅町の世羅高等学校(以下、世羅高校)陸上競技部である。世羅高校陸上競技部は1940年代から駅伝の全国大会で数々の優勝・入賞経験をもち、その実績から世羅町は町内外から「駅伝のまち」として認知されている²⁾。

本稿執筆に先立ち、資料調査と聞き取り調査、アンケート調査を実施した。資料調査では統計資料や行政資料、学校関係資料などを収集し、世羅町と世羅高校、世羅高校陸上競技部についての基礎情報を整理した。聞き取り調査は、2019年6月から2021年7月にかけて、世羅高校陸上競技部と世羅高校陸上競技部OB・OG会、世羅町役場、世羅町観光協会の関係者を対象に実施し、世羅高校および同校陸上競技部の現況、世羅高校陸上競技部への支援・応援活動などを聴取した。アンケート調査は、世羅高校および同校陸上競技部に対する世羅町民の意識を把握するため、世羅高校の立地する同町大田地区の住民を対象に、2019年11月10日から25日にかけて実施した。具体的には、大田地区各自治会の協力を得て全1,217世帯に調査票を配布し³⁾、各世帯の世帯員1名に回答を依頼した。回答済の調査票は返送用封筒を用いて郵送法により回収した。回答数は158、回収率は13.0%であり、回答者の性別年齢別内訳は第1表に示した。

以下、Ⅱでは主に資料調査をもとに世羅町および世羅高校の概況を整理する。続くⅢでは、主に聞き取り調査をもとに、世羅高校陸上競技部の活動および運営・支援体制、さらに世羅高校陸上競技部を活かしたまちづくりの動きを詳述する。Ⅳでは町民アンケート結果をもとに世羅高校陸上競技部に対する町民の意識を示す。Ⅴは本稿のまとめであり、本研究で得られた知見を要約するとともに、今後の研究課題を示す。

第1表 アンケート回答者の性別年齢別内訳

性別 年齢	男性		女性		回答者全体	
	(実数)	(割合)	(実数)	(割合)	(実数)	(割合)
20~30歳代	1	0.6%	6	3.8%	7	4.5%
40~50歳代	15	9.6%	15	9.6%	30	19.1%
60歳以上	60	38.2%	60	38.2%	120	76.4%
回答者全体	76	48.4%	81	51.6%	157	100.0%

資料：アンケート調査

II 世羅町と世羅高校の概況

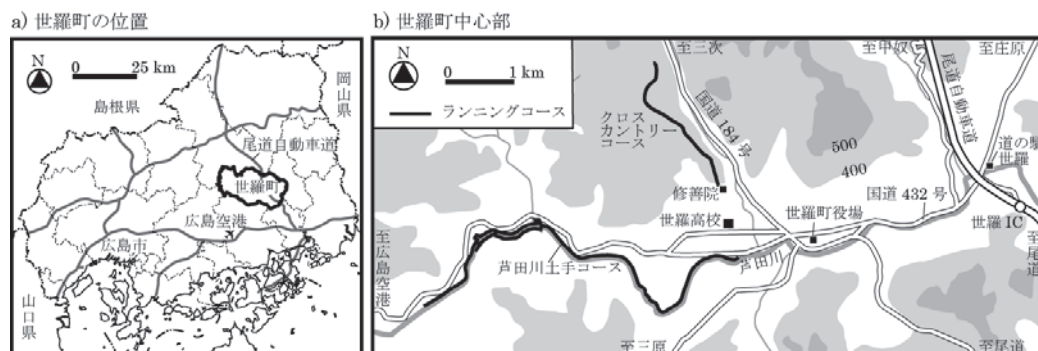
1. 世羅町をとりまく状況

世羅町は広島県中東部の標高300~500mの世羅台地に位置し、瀬戸内海に流れる芦田川水系と日本海に流れる江の川水系の分水嶺にあたる。年平均気温は約13°Cで、瀬戸内海に面する広島市の年平均気温と比べて3~4°C低い。東は府中市、南は尾道市と三原市、西は東広島市、北は三次市に囲まれ、各市の中心部まで20~30km圏内にある(第1図a)。2011年の広島中央フライトロード一部開通と2015年の尾道自動車道全線開通により、主要都市や交通施設への所要時間は大幅に短縮し、広島空港まで約30分、尾道市や三次市まで約40分、広島市まで約1時間30分で移動可能となった。

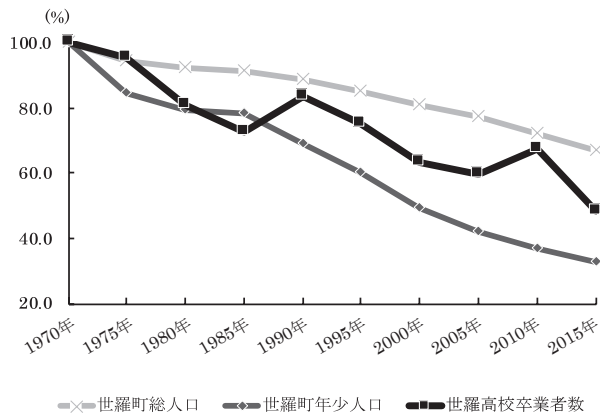
世羅台地は中世から紀州高野山領荘園「大田庄」として発展した穀倉地帯であった。また、1960年代の県営農地開発事業と1970年代後半からの国営農地開発事業を通じて、入植者による果樹や野菜、花卉などの生産が盛んとなり、広島県の主要農業地域の1つとなった。近年は、果樹や花卉を資源とした観光農業とともに、生産から加工、販売まで一貫して行う6次産業化に力を入れている。尾道自動車道の全線開通に合わせて2015年に開駅した道の駅世羅はその拠点施設であり、管理運営を担う世羅町観光協会が中心となって観光情報の発信や特産品の開発、販売を行っている。こうした取組みを通じて、世羅町への入込観光客数は2010年の1,590千人から2015年に1,936千人、2019年に1,944千人に増加し、観光消費額も2010年の2,041百万円から2015年に2,326百万円、2019年に2,652百万円へと増加した(広島県世羅町, 2020)。

しかし一方で、世羅町の定住人口は近年、一貫して減少傾向にある(第2図)。1970年の総人口(24,384人)を100とすると、1985年に91.5、2000年に80.7、2015年に67.0(16,337人)となり、45年間で約3分の2に減少した。年少人口に限れば、1970年(5,366人)を100とすると、1985年に78.6、2000年に49.1、2015年に32.9(1,766人)と、45年間で約3分の1に減少しており、少子化が急速に進行している。

こうした中で、世羅町は2015年度に「世羅町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を、2020年度に「世羅町人口ビジョン及び世羅町第2次まち・ひと・しごと創生総合戦略(以下、第2次総合戦略)」を策定した。このうち第2次総合戦略では、2060年の目標人口を9,500人とし、「いつまでも住み続けたい日本一のふるさと」を将来像に掲げ、若者向けの働く場の創出や移住・定住の促進、子供を安心して産み育てられる環境づくり、安心して暮らせる生活基盤の整備に取り組む



第1図 研究対象地域



第2図 世羅町人口および世羅高校卒業生数の推移 (1970-2015年)

資料：広島世羅町 (2020) および広島県立世羅高等学校 (2019) による。

注：1970年を100とした各年の割合を示している。

ことにしている。教育関連の具体的施策としては、小・中学生の学習支援、世羅高校の教育環境支援、町内就労者の奨学金返還支援などを掲げている (広島県世羅町, 2021)。

2. 世羅高校をめぐる状況

世羅高校のルーツは、1896 (明治29) 年に創設された私立甲西会と1897 (明治30) 年に創設された私立裁縫所に求められる。私立甲西会は1923 (大正12) 年に世羅郡13ヵ町村組合世羅中学校、1926 (大正15) 年に広島県立世羅中学校と改称された後、1948 (昭和23) 年の学制改革により広島県世羅高等学校となった。一方、私立裁縫所は1904 (明治37) 年に世羅郡女子実業学校、1911 (明治44) 年に世羅郡立世羅女学校、1921 (大正10) 年に広島県立甲山高等女学校と改称された後、1948 (昭和23) 年に学制改革により広島県甲山高等学校となった。そして、1949 (昭和24) 年の広島県高等学校再編成により、旧世羅高等学校と旧甲山高等学校を統合する形で、同年4月に広島県世羅高等学校が誕生した⁴⁾。

世羅高校は1949 (昭和24) 年に普通科と生活科、1950 (昭和25) 年に農業科、1952 (昭和27) 年に定時制課程普通科を設置し、その後何度かの学科再編を経て、2010年度以降は全日制の普通科、生活福祉科、農業経営科の3学科体制で運営している (広島県立世羅高等学校, 2019)。このうち、普通科は近年、学力保障に力を入れ、習熟度別授業や特進クラスの設置、個別添削指導や小論文・面接指導、長期休業中の補習などを実施している。農業経営科は、地域産業の担い手を育てることを目標に、資格・検定の受験や生産・販売実習に加えて、町内関係機関の協力を得てプロジェクト型学習Project-Based Learningに取り組んでいる⁵⁾。生活福祉科は、ファッションと食物調理、保育、介護福祉に関する職業人の育成を目指し、資格・検定の受験や実習に取り組むほか、ファッションショーや着付けショーを通して学習成果を発表したりしている。

課外活動については、アメリカ合衆国および台湾の姉妹校との交換留学や相互訪問、ケニアからの留学生の受入れなど国際交流活動に取り組むほか、校訓「文武不岐」の下でクラブ活動にも力を入れている。2019年度現在、陸上競技部や硬式野球部、サッカー部、空手道部など9つの運動部、吹奏楽部や書道部、写真部、科学部など8つの文化部に加え、農業経営科の生徒を中心に組織する農業クラブと生活福祉科の生徒を中心に組織する家庭クラブがある (広島県立世羅高等

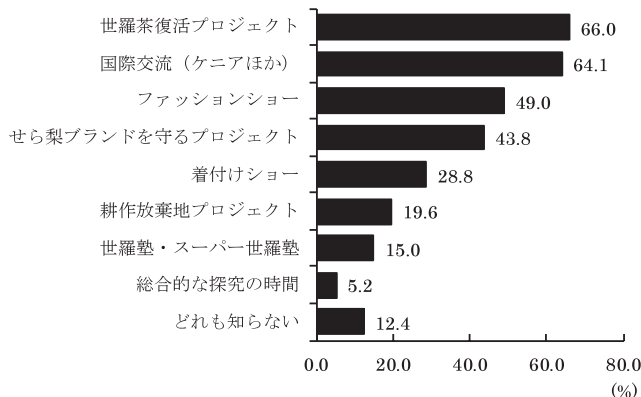
学校，2019）。

しかし、生徒数は近年一貫して減少傾向にある。卒業生数の年度別推移をみると（第2図）、1970年度（296名）を100とすると、1985年度に72.6、2000年度に63.2、2015年度に48.3（143名）と、45年間で半分以下に減少している。2019年度の全生徒数は351名で、学年別にみると、3年が126名、2年が116名、1年が109名と、いずれも3学科合計定員の160名を下回る現状にある。そうした生徒数減少の要因と考えられるのが、世羅町における年少人口の減少と町外の高校へ進学する町内中学校卒業生の増加である。世羅高校での聞取りによれば⁶⁾、3学科合計定員160名に対して、町内中学校の卒業生数は近年120～130名で推移しており、そのうち約半数は町外の高校に進学する状況にあるという。

こうした状況に対して、世羅高校は学校統廃合の危機感を抱き⁷⁾、教育内容の充実と発信に努めている。特に近年は、学校魅力のさらなる向上に向けて地域社会との連携を強化しており、2020年度には教育関係者と農業経営者、国際交流団体会長、陸上競技関係者など9名からなる学校運営協議会を組織し、外部者の意見を取り入れながら学校経営を行う体制を構築した。

世羅町役場も危機意識を共有し、世羅高校の保護者や同窓会員らが組織する「世羅高校を育てる会」の協力を得て、「世羅高生応援プロジェクト」を2016年度から実施している。具体的な支援内容は、大手予備校講師による講習会の開催支援、各種検定合格者への講習料や検定料の補助、校外研修・校外活動にかかるバス借上費や運営費等の補助、クラブ活動遠征費の補助、通学バス定期券購入費や通学バイクガソリン代の補助である⁸⁾。また、町広報紙「広報せら」に世羅高校特集ページを設け、同校に関するさまざまな情報を毎月掲載して、町民の世羅高校に対する理解や関心を高め、入学者確保に結びつけようとしている⁹⁾。

世羅町民も、世羅高校の生徒数が減少する実態を認識し、統廃校の対象となることを懸念している。町民アンケートによれば、158人中131人（回答者全体の82.9%）が世羅高校の生徒数が減少傾向にあり、定員を下回る現状を認識している。一方で、153人中134人（同87.6%）が世羅高校の取り組む教育活動を1つ以上認知しており（第3図）、これらをさらに充実させ、入学者数の増加につなげることを期待している。「もっと地元の中学生在が世羅高校に進学できるようになればいいと思います（ID：94）」「世羅高校の特長は農業経営科と生活福祉科といえる。世羅町の特色を生かした教育を町内企業と連携して強化すべきだ考える（ID：123）」「世羅高校でし



第3図 世羅高校の特色ある教育活動の町民認知度（2019年，回答者数153，複数回答）

資料：アンケート調査

か体験・学習できない教育を将来を見据えて取り組んでほしい (ID:145)」などの自由記述は、そうした町民意識を例示している。また、学力向上により大学進学実績をあげ、入学者確保につなげることを期待する意見も多くみられた。「国公立大や有名私大への進学実績を上げ、行きたい学校になるように努力すべき (ID:117)」「学力も年々伸びており、世羅高校全体の頑張りを見てきています。少子化・高校進学者の志望の多様化等で定員割れが続いていますが、何とか頑張ってもらいたい思いで一杯です (ID:47)」などの自由記述がそれを例示している。

Ⅲ 世羅高校陸上競技部の活動と運営・支援体制

1. 陸上競技部の伝統

世羅高校における駅伝の伝統は、1947 (昭和22) 年4月に内海富貴郎が世羅中学校 (当時) に体育教師として着任したことに始まる。自身も陸上競技経験をもつ内海は、物資が不足する中であって靴さえあれば誰もが実施できる長距離走を同校の体育授業に取り入れた (新畑, 1982; 岩本, 2016)。内海の長距離走授業は校内駅伝競走大会に発展し、さらに1948 (昭和23) 年2月の全国中学校駅伝大会では7位入賞を果たした。その後、1949 (昭和24) 年1月の第1回全国高校駅伝大会と1950 (昭和25) 年1月の第2回全国高校駅伝大会で連続して3位に入賞、さらに全国高等学校駅伝競走大会 (以下、全国高校駅伝) が創設されると、1950 (昭和25) 年12月の第1回大会と1951 (昭和26) 年12月の第2回大会を連覇し、世羅高校は駅伝強豪校として全国に知られる存在となった (新畑, 1982)。

その後、全国高校駅伝に出場できない時期もあったが、1960年代後半から全国高校駅伝で優勝2回、3位3回などの好成績を続け、中京高校および小林高校とともに「高校駅伝御三家」と呼ばれるようになった (岩本, 2016)。しかし、1980年代半ば以降は全国高校駅伝で二桁順位が続いたり、出場できない年も増えたりした。そうした中、1999 (平成11) 年2月には、卒業式での君が代斉唱と国旗掲揚をめぐる校長が自死する事案が発生し、学校全体の立て直しが急務とされる事態に陥った。

こうした状況の下、1999 (平成11) 年4月に着任した田邊康嗣校長は「町民全員の心のよりどころである駅伝を強化すれば、この学校も、この町も絶対よくなっていく」 (岩本, 2016, p.163) と考え、陸上競技部の再強化に乗り出した。具体的に、普通科を総合選択制¹⁰⁾に変更することで学区外から入学しやすくしたり、2002 (平成14) 年度からは長距離走を得意とするケニア人留学生を受け入れたり、2004 (平成16) 年度には中学校の陸上競技指導者とのパイプをもち、生徒指導にも定評のあった岩本真弥を新たな指導者として迎え入れたりした。岩本が着任してからは田邊校長の期待どおりに陸上競技部の強化が進み、2020 (令和2) 年度までに全国高校駅伝で男子が6回、女子が2回優勝するなど、世羅高校陸上競技部は再び黄金期を迎えている。

2. 陸上競技部の練習環境

世羅高校陸上競技部は、初代監督の内海以来、長距離種目を専門とする教諭が部長や監督を代々務めている。また1975 (昭和50) 年に着任した宮広重夫以降、卒部生が指導者を務めることが慣例となっている。岩本も卒部生の一人であり、彼が退任した後の2019 (平成31) 年度からも同じく卒部生である大工谷秀平が監督を務めている。

世羅高校陸上競技部は伝統的に練習量が多く、戦前から続く体育思想を反映した精神力重視の

指導が行われてきた(岩本, 2016)。2004(平成16)年に着任した岩本も、学校全体を立て直す必要もあって、当初は部員の生活態度や練習方法を細かく管理する指導を行っていたが、2000年代後半からは、生活指導を必要最低限のものに限り、また部員自身が自分のレベルや状態に合った練習内容を計画、実施するなど、部員の自主性を尊重した脱管理的な指導に切り替えた。こうした生徒の自主性を重んじる指導は、岩本が監督を退任した2019(平成31)年度以降も継続し、世羅高校陸上競技部の新たな伝統として定着しつつある¹¹⁾。

また2020(令和2)年8月には、世羅町役場と世羅高校、株式会社大創産業(以下、ダイソー)がスポーツ(駅伝)分野における連携協力に関する協定を締結し、世羅高校陸上競技部とダイソー女子駅伝部の相互交流を開始した(広島県立世羅高等学校, 2020)。この協定にもとづき、ダイソー女子駅伝部員は週2~3日、世羅高校で陸上競技部員と合同で練習するようになり、特に女子部員は実業団選手の練習を間近に見ることで競技意欲を向上させたり、長距離走の技術を習得したりできるようになった。また、ダイソー女子駅伝部は世羅高校を退職した岩本が監督を務めており、岩本が外部コーチとして陸上競技部員を継続的に指導している¹²⁾。

陸上競技部の練習は同校運動場で主に行われるが、校外に整備された2本のランニングコースも練習用走路として使用される。往復約4kmのクロスカンントリーコースと最長約12kmの芦田川土手コース(第1図b)は未舗装で足腰への負担が少なく、特に起伏に富むクロスカンントリーコースは脚力や心肺機能などの強化に役立っているという¹³⁾。また、同校の近くに立地する寺院「修善院」は、自主的に早朝の坐禅を組んだり、住職の講話を聞いたりするなど、部員のメンタルトレーニングの場となっている。さらに、夏休みなどの長期休暇期間には校外で合宿練習を行うほか、年間を通じて県内外各地で開催される大会や記録会に積極的に参加している¹⁴⁾。

部員数はここ数年、男子約50名、女子約20名、合計約70名で横ばいに推移している。その9割以上が世羅町外の出身者で、近隣の府中市や三原市、東広島市をはじめとする県内各地のほか、島根県や高知県、京都府、神奈川県など県外から進学、入部した者も数名在籍する。町外の中学校出身者は、監督らの誘いを受けて入部した者もいるが、その多くは全国高校駅伝で活躍する世羅高校陸上競技部に憧れ、自ら選択して世羅高校に進学し、陸上競技部に入部している¹⁵⁾。このほか、2002(平成14)年度以降はケニア人留学生が毎年2~3名在籍している。ケニア人留学生については、受入当初こそ校内外から賛否両論があったが、日本の生活に溶け込み、競技に真摯に取り組もうとする彼らの姿勢は他の部員への良い刺激となり、陸上競技部全体の活性化につながっているという¹⁶⁾。

部員は、自宅通学が可能かどうかにかかわらず、希望者は全員が親元を離れて同校の近くに立地する寄宿舎¹⁷⁾に入寮し、共同生活を送っている。寄宿舎は広島県が整備したもので、同校から委嘱された町民12名(2019年度現在)が寄宿舎職員として管理運営を担っている。また、陸上競技部の顧問教員が舎監を務め、交代で寄宿舎に宿泊するなどして、部員の生活指導を行っている。

3. 陸上競技部への支援

陸上競技部は世羅高校のクラブ活動の1つに位置づけられるが、その運営は町民や校外組織からの支援により成り立っている。その支援は、経済的支援と道具的支援、精神的支援の3つに分けることができる。

経済的支援について、大会や記録会への参加、合宿練習などにかかる経費負担は、学校から配

分される部費のほか、在籍部員の保護者と町民有志らが組織する陸上競技部後援会（以下、後援会）、卒部生が組織する陸上競技部OB・OG会（以下、OB・OG会）の支援によるところが大きい。このうち後援会は、1948（昭和23）年の全国中学校駅伝大会への参加にあたり世羅中学校の卒業生数名が寄付したことをきっかけに発足し（新畑，1982）、1950年代からその輪が広がり、次第に世羅町長や地元選出国議員が会長を務めたり、町内主要事業所が入会したり、世羅高校同窓会が協力したりするなど、町ぐるみの支援体制が確立した。

その結果、寄付額は必要経費を十分に賄うものとなったが、1980年代半ば以降に全国高校駅伝等での成績が下降すると、後援会からの寄付額は徐々に減少し、各種大会・記録会への参加に必要な経費の確保に苦慮するようになった。そこで、2004（平成16）年に着任した岩本は後援会とは別にOB・OG会を再組織し、独自に陸上競技部への寄付を募ることにした。こうしてOB・OG会と後援会という2つの組織を通じて世羅町内はもとより近隣の部員出身市町でも寄付を呼びかけた結果、全国高校駅伝での好成績により陸上競技部への関心と期待が再び高まったこともあって、年間寄付額は1,000万円を超えるまでになった¹⁸⁾。

さらに、2012（平成24）年から世羅高校と町内事業者が共同開発した清涼飲料水の売上げの一部を後援会に寄付したり、2016（平成28）年からは世羅町内に設置した清涼飲料水の自動販売機の売上げの一部を後援会に寄付したりするなど、町ぐるみで経済的支援の拡充に努めている。このほか、2002（平成14）年度から開始したケニア人留学生の受入れにあたって、世羅高校と町民有志が世羅高校国際交流推進会議を組織し、町民や世羅高校同窓会、OB・OG会からの寄付をもとに、ケニア人留学生の生活費を提供している¹⁹⁾。

しかし、2010年代後半になると、世羅町の人口および世帯数の減少、在籍生徒数の減少、後援会会員の高齢化と減少、自治会に入会せず陸上競技部への関心も低い若年者世帯の増加などにより、後援会を通じた寄付額が再び減少し、大会出場等に必要な経費を確保することが懸念される状況となった。そのため、OB・OG会は2020（令和2）年にクラウドファンディング事業²⁰⁾「TOP TO RUN！高校駅伝のルーツ世羅高校駅伝必勝プロジェクト」を実施した。このプロジェクトは練習環境の整備とケニア人留学生の支援のために200万円を集めることを目標に行われ、2020年11月16日から12月23日までの1か月あまりで目標額を上回る約480万円を集めることに成功した（神田，2020）。

道具的支援としては、寄宿舎の管理運営とランニングコースの管理が挙げられる。前者については、世羅高校から管理業務を委嘱された複数の町民が施設の清掃・修繕、食事の提供を行っている。また、農業を営む者が収穫した米や野菜を寄宿舎に差し入れたり、主婦らの組織する世羅町食生活改善推進協議会が栄養バランスに配慮した応援メニューを考案し、寄宿舎で提供したりするなど、町民有志による自主的な支援も行われている²¹⁾。後者については、ランニングコースが未舗装で雑草も茂りやすいことから、コース近隣に住む町民有志が定期的に路面の状況を確認し、大きな石や枝、落葉を取り除いたり、草刈りを行ったりしている²²⁾。こうした管理作業によって部員はいつでもランニングコースを利用することができる。

精神的支援としては、駅伝に高い関心をもつ町民有志が平日放課後に行われる全体練習や早朝自主練習を見学したり、校外のランニングコース沿道に住む町民が練習時に励ましの声をかけたりすることが、部員の練習意欲の向上につながっていることが挙げられる。そうした町民による注視は部員の生活態度や練習姿勢をチェックする機能も果たしており、町民から顧問教諭に提供された情報が部員の指導に役立つこともあるという²³⁾。

また、町民への情報提供と応援機会の確保も、町民の陸上競技部への関心を高めたり、応援の機運を醸成したりするという点で精神的支援に含まれる。これに関して世羅町役場は、広報紙「広報せら」に世羅高校特集ページを設けて陸上競技部の競技成績を掲載したり、全国高校駅伝で優勝した時には優勝パレードを開催し、町民とともに祝意を表したりしている²⁴⁾。また世羅町観光協会は、2015（平成27）年から道の駅世羅で全国高校駅伝のパブリックビューイングを開催し、町民等来駅者に応援の機会を提供している。このほか、世羅町商工会大田支部は2007（平成19）年から全国高校駅伝での活躍を願うイルミネーションを芦田川沿いに設置し、応援の機運を高めている²⁵⁾。

こうした町民や関係機関からのさまざまな支援について、陸上競技部の指導教諭は部員に対して、支援や応援に感謝しながら日々の練習に励むとともに、大会等ですぐれた競技成績を残して町民や関係機関に喜んでもらうことで支援や応援に応えようと指導している²⁶⁾。また、多くの町民等から注目され、期待される立場であるからこそ、きちんとした挨拶をしたり、身だしなみに注意を払ったりすることの重要性を論じ、部員の生活指導を行うようにしている。さらに、町内で開催される大会や町代表選手が出場する大会などに部員が出場したり、運営に協力したりするなど、陸上競技を通じた地域貢献活動を積極的に行うようにしている。こうした地域貢献への積極姿勢は町民や関係機関から評価され、陸上競技部への支援を継続・充実させようという好循環を生み出すことにもつながっている。

4. 駅伝のまちづくり

町民や関係機関による陸上競技部への支援は、伝統ある陸上競技部を世羅町の地域資源として活用しようとする「駅伝のまちづくり」へと発展した。その端緒となったのが、世羅町役場が2009（平成21）年度に実施した内閣府補助事業「地方の元気再生事業」である。この事業では、陸上競技部員が練習で使用するランニングコースを試走するモニターツアーを実施し、参加者から好評を得た。その後、2010（平成22）年度観光庁補助事業「国内スポーツ観光活性化調査事業」と2011（平成23）年度観光庁補助事業「国内スポーツ観光顧客満足度調査」を続けて実施し、大学陸上競技部の合宿を誘致したり、修善院での座禅体験をプログラムに組み入れたツアーを実施したりした。さらに2011（平成23）年度には、世羅町観光協会と世羅町商工会が提案した「せら高原RUNRUNプロジェクト」が全国商工会連合会「地域力活用新事業全国展開支援事業」に採択され、大学陸上競技部の合宿誘致に加え、市民ランナーの集客促進策が検討されたりした。

これらの補助事業が終了した2012（平成24）年度以降は、世羅町が独自予算を確保し、世羅町観光協会に委託する形で「せら高原RUNRUNプロジェクト」を実施するようになった。この事業では、大学陸上競技部の合宿誘致に加え、世羅高校陸上競技部員が練習に使用するランニングコースを紹介する地図を作成、配布したり、県内中学生を招いた世羅高校陸上競技部員との合同合宿を開催したりしている²⁷⁾。

このほか、世羅町観光協会は駅伝関連商品の開発と販売にも力を入れている。上記した清涼飲料水の他にも、陸上競技部女子部員の意見を取り入れた日焼け止めクリームや広島東洋カープと共同開発したTシャツやタオルマフラー、世羅高校陸上競技部カラーの緑と赤を配色したランニングシューズなどがあり、道の駅世羅に特設コーナーを設置して展示、販売している（第4図）。また道の駅世羅では、スタッフが駅伝をイメージさせる制服を着用したり、ランニングコースマップを配布したりするなど、世羅町が「ランナーの聖地」（岩本、2016、p.194）として注目さ



第4図 道の駅世羅の駅伝コーナー

資料：筆者撮影（2021年7月3日）

れ、より多くの人に来訪してもらえるように取り組んでいる。

世羅町役場も駅伝を町の地域資源の1つに位置づけ、それを活かしたスポーツや観光の振興に力を入れている。例えば、既存の世羅駅伝大会と世羅西駅伝大会、甲山駅伝大会、中国実業団駅伝に加えて、2015（平成27）年から中国女子駅伝を世羅町に誘致し、町外から多くの一流ランナーを迎え入れるようになった。また、2014（平成26）年度から上記の「せら高原RUNRUNプロジェクト」を世羅町観光協会に委託して実施するほか、2017（平成29）年策定の「世羅町観光振興基本計画」には駅伝を活かした観光振興に取り組むことを明記し（広島県世羅町、2017）、「花とフルーツ、駅伝」をキャッチフレーズとした観光宣伝に努めている。これらは駅伝を資源としたスポーツツーリズムの確立、振興に向けた取組みといえる。

さらに世羅町は、上記したように、2020（令和2）年に世羅高校およびダイソーとの連携・協力にかかる協定を締結した。この協定締結により、上記した世羅高校陸上競技部員の競技力向上に加え、ダイソー女子駅伝部が世羅町に居住する小・中学生を対象とした陸上競技教室を開催することにより、世羅町における陸上競技人口と世羅高校陸上競技部への入部者数を増加させることを目指している。一方でダイソー女子駅伝部は、世羅高校陸上競技部女子部員の卒業後の進路となることも想定されており、実際に2021（令和3）年までに5名の世羅高校陸上競技部出身者が入社している。また将来的には、ダイソー女子駅伝部に加えて、広島県内に練習拠点を置く他の実業団チームとの協定の締結も構想されている。これらを通して、世羅高校陸上競技部を拠点に、そして同校が立地する世羅町を舞台に、小・中学生から高校生、実業団まで、一貫・連携した指導による競技力の向上と選手のキャリア形成支援を実現させることが目指されている²⁸⁾。

IV 世羅高校陸上競技部に向けられる町民のまなざし

1. 陸上競技部の活躍が町民に与える影響

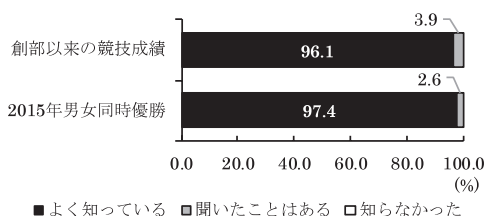
陸上競技部の活躍を世羅町民はどのくらい認知し、またどのように認識しているのであろうか。まず、陸上競技部の活躍に対する町民の認知度をみると（第5図）、陸上競技部が全国高校駅伝等で好成績を残してきたことを「よく知っている」者が回答者全体の96.1%、「聞いたことはある」者が同3.9%で、「知らなかった」者はいなかった。また、2015年の全国高校駅伝男女同時優勝に

については、「よく知っている」者が同97.4%、「聞いたことはある」者が同2.6%で、「知らなかった」者はいなかった。

こうした活躍を受けて、回答者のほとんど（回答者全体の97.4%）は陸上競技部を世羅高校を代表するクラブとみなしている（図省略）。また、活躍に対して抱いた具体的な感情としては、「陸上競技部を誇りに思う」と感じた者が回答者全体の84.6%で最も多く（第6図）、陸上競技部が町民の誇りとなっていることがわかる。「陸上競技部を支援したい」と考えた者も同38.5%おり、全国高校駅伝等での活躍が町民からのさらなる応援・支援に結びつく可能性をもつことが示唆された。さらに、「自分も何かを頑張ろうと思う」と感じた者も同23.1%おり、陸上競技部の活躍が町民に精神的活力を与えていることも確認できた。一方で、「他のクラブ活動も注目してほしい」と感じた者が同37.2%おり、「世羅高校＝陸上競技部ではなく、世羅高校＝全生徒であってほしい（ID：135）」という自由記述にもみられるように、世羅高校に在籍するすべての生徒の活躍と成長、それを通じた世羅高校全体の活性化を望む声も少なくない。

また、陸上競技部への支援・応援の有無を尋ねたところ（第7図）、何らかの方法で支援または応援している者が回答者全体の80.9%を占めた。内容別にみると、「テレビ観戦」（同59.2%）が最も多く、これに次いで「優勝パレード見学」（同35.5%）、「日頃からの部員への声かけ」（同21.1%）、「パブリックビューイング」（同10.5%）、「幟・ポスター等の掲示」（同7.9%）の順に多かった。これらのうち「テレビ観戦」「優勝パレード見学」「パブリックビューイング」は応援行動に、「日頃からの部員への声かけ」「幟・ポスター等の掲示」は精神的支援に位置づけられる。

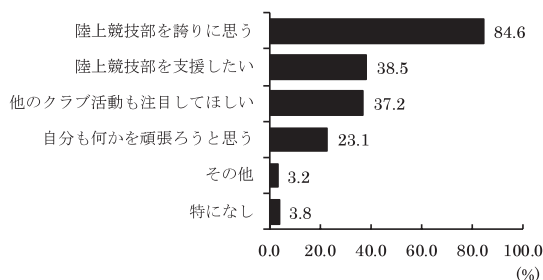
これに対して、「町内駅伝大会の運営協力」（同5.3%）や「外国人留学生の受入支援」（同3.3%）、「合宿の誘致・受入支援」（同2.6%）、「寄宿舎の運営協力」（同2.0%）、「ランニングコースの整備」（同1.3%）といった道具的支援については比較的少人数が回答した。このことから、陸上競



第5図 世羅高校陸上競技部競技成績の町民認知度（2019年）

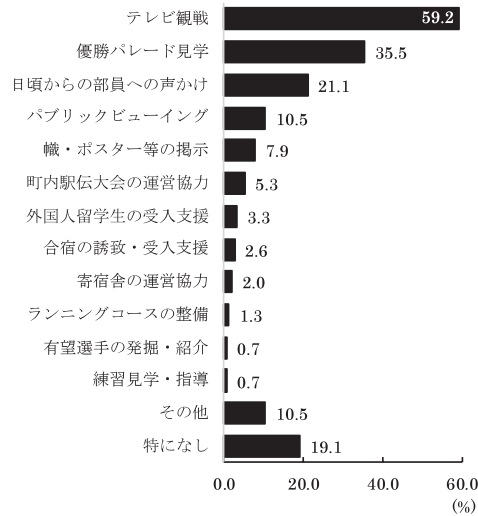
資料：アンケート調査

注：創部以来の競技成績の回答者数は155、2015年男女同時優勝の回答者数は156。



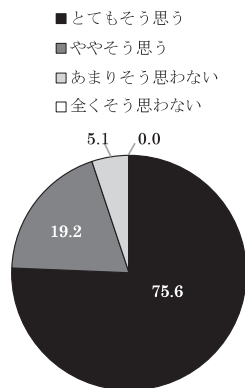
第6図 世羅高校陸上競技部の活躍に対する町民感情（2019年、回答者数156、複数回答）

資料：アンケート調査



第7図 世羅高校陸上競技部への町民の支援・応援方法（2019年，回答者数152，複数回答）

資料：アンケート調査



第8図 世羅町を「駅伝のまち」と認識する町民の割合（2019年，回答者数156）

資料：アンケート調査

注：小数点以下第2位を四捨五入したため，合計値は100%にならなかった。

技部への道具的支援は一部の町民が担い，多数の町民は精神的支援や応援を通じて陸上競技部と関わっているという，町民による支援・応援の構造が浮かび上がる。

ここで，高千穂高校剣道部に対する町民意識調査結果（和田，2020）と比較すると，何らかの方法で高校運動部を支援・応援している者の割合は世羅町の方が高千穂町より65ポイント高く，特に応援を行う者の割合に大きな差があった。これは，大会等のテレビ中継がほとんどない剣道に対して，駅伝は全国高校駅伝がテレビ中継され，リアルタイムで視聴，応援できるというメディア事情の違いを反映していると考えられる。また，高千穂町で回答者数が最も多かった「日頃からの部員への声かけ」についても，世羅町の方が高千穂町より16ポイント高かった。このことは，世羅高校陸上競技部員が校外のランニングコースで練習したり，町内で開催される駅伝大会に出場したり，優勝パレードに参加したりすることから，町民が部員を直接見たり，声をかけたりする機会が多いことを反映していると考えられる。

このように世羅町では、陸上競技部への道具的支援を行う者は一部の町民に限られるが、練習環境や部員の地域貢献活動、さらにメディア事情から陸上競技部への精神的支援や応援に関わる町民が多い。そうした精神的支援や応援を通じて、町民の多くが陸上競技部を自分に身近な存在と感じ、その活躍を誇りに感じたり、精神的活力を得たりしていると考えられる。町民のほとんど（回答者全体の94.8%）が世羅町を「駅伝のまち」と認めていること（第8図）も、こうした世羅町の状況を表したものとみることができよう。

2. 陸上競技部への期待と課題

それでは、町民は陸上競技部に対して具体的にどのような印象をもち、またどのようなことを期待したり、課題と感じたりしているのであろうか。第2表は、町民アンケート調査で得られた陸上競技部に対する自由記述についてテキストマイニングを行い、階層クラスター分析の結果を示したものである。階層クラスター分析を行ったのは、相互の関連の強さから出現する語をグループ化しやすいという理由による。分析の結果、6つのクラスターが検出された。そのうち、出現回数が他のクラスターに含まれる語と比べて突出して多く、他のクラスターに含まれる語との関連性も強い語からなる基幹クラスターを除く5つのクラスターについて、各クラスターに含まれる語と自由記述の内容をもとに、「世羅高校および陸上競技部に対する印象」「陸上競技部員に対する印象」「陸上競技部員の地域貢献活動」「陸上競技部との関わり」「陸上競技部の支援と高校の活性化」と表現することにした。

第2表 世羅高校陸上競技部に対する町民の期待と課題（2019年）

クラスター	頻出語（出現回数）	対応する自由記述の例
世羅高校および陸上競技部に対する印象	クラブ(13)、全国(7)活動(6)、誇り(4)	「世羅」の名前が全国に知られているのは、世羅高校陸上競技部の活躍があるからこそ。その意識を町民に広く浸透させるべきだと思います。(ID: 117) 陸上競技部の活躍がクローズアップされて、他のクラブ活動が薄められている感があるが、農業クラブ、家庭科クラブの活躍もすばらしいものがあります。また、学力も年々伸びており、世羅高全体の頑張りを見てきています。少子化や高校進学者の志望の多様化等で定員割れが続いていますが、何とか頑張ってもらいたい思いで一杯です。(ID: 47)
陸上競技部員に対する印象	部員(19)、応援(16)練習(8)、挨拶(6)	世羅高校陸上競技部の部員が練習で川土手を走っている姿を見かけると、実際には何もみませんが、心の中で「頑張れ」と応援しています。(ID: 110) 車とかですれ違ったら、必ず笑顔で挨拶をしてください、こちらもよい気持ちになります。優しさを感じます。頑張ってください。(ID: 52)
陸上競技部員の地域貢献活動	町内(16)、駅伝(13)大会(5)、選手(5)	町内行事にいろいろ参加してくれて、ありがたいと思います。(ID: 24) 町内の駅伝大会に毎年チームを作って出場して下さってありがたいし、うれしく思っています。(ID: 147)
陸上競技部との関わり	活躍(13)、支援(5)関わり(5)、中学校(5)	町内の中学校の出身者がいて活躍すれば、もっと関わりが深まり、関心・支援も高まるのではないかと。陸上競技部の部員の多くは町外の中学校から入学して3年間を寮で過ごし、その間は町民との交流もあるが、卒業とともに去っていく実態にある。(ID: 142)
陸上競技部の支援と高校の活性化	寄付(12)、生徒(9)今後(7)、毎年(4)学校(4)、減少(4)	最近では町民からの寄付が集まりにくくなっています。(中略) 今後はどうすれば寄付が集まるかが問題だと思います。(ID: 94) 陸上競技部の部員だけで約2クラスの人数に相当する。過疎・少子化で生徒数が減少する中で、大きな位置づけであると思う。そのためには、今後も町民や行政からの支援を充実させることが重要である。(ID: 158)

資料：アンケート調査

注1：自由記述（63件・158文）のKH-Coderを用いた階層クラスター分析（Ward法、出現回数4回以上の22語）の結果を示している。

注2：実際には6つのクラスターが検出されたが、「世羅」「高校」「陸上」「競技」「町民」の5語で構成されるクラスターは各語の出現回数が突出して多く、他5つのクラスターに含まれる語との関連性も強いことから、他クラスターとは性格が異なる基幹クラスターと判断し、本表には掲載しなかった。

「世羅高校および陸上競技部に対する印象」には「クラブ」「全国」「活動」「誇り」の4語が含まれる。このクラスターでは、陸上競技部の全国レベルでの活躍によって世羅の知名度が上がっていることに加え、陸上競技部の他にも実績を上げるクラブや学力向上に向けた取組みの充実を認め、世羅高校全体の活性化を期待する意見が述べられている。

「陸上競技部員に対する印象」には「部員」「応援」「練習」「挨拶」の4語が含まれる。このクラスターでは、町民は通学路やランニングコースで部員を見かけることが多く、彼らのきちんとした挨拶や一生懸命練習する姿に好印象を抱いていることがうかがえる。

「陸上競技部員の地域貢献活動」には「町内」「駅伝」「大会」「選手」の4語が含まれる。このクラスターでは、世羅町内で開催される駅伝大会やイベントに陸上競技部員が積極的に参加することに対する感謝が述べられている。

「陸上競技部との関わり」には「活躍」「支援」「関わり」「中学校」の4語が含まれる。このクラスターでは、例文が示すように、町民と在籍部員との関わりはすでに行われているが、町内小・中学生の陸上競技をさらに活発にし、町出身者が世羅高校陸上競技部で活躍することで、町民がさらに強く誇りに感じたり、町民との交流がさらに活発化したりすることへの期待が述べられている。

「陸上競技部の支援と高校の活性化」には「寄付」「生徒」「今後」「毎年」「学校」「減少」の6語が含まれる。このクラスターでは、陸上競技部への寄付の現況が報告されたり、今後の方策が提案されたりするほか、それらの支援を通じて陸上競技部を活性化させることで、世羅高校の魅力を高め、学校存続に結びつけていくことへの期待などが述べられている。

以上から、町民は陸上競技部の活躍や部員の練習・生活態度、地域貢献活動を概ね好意的に捉えていることがうかがえる。また今後に向けては、町内陸上競技の底辺拡大や、陸上競技部の存在を強みとした世羅高校の存続・活性化を期待している状況も読み取れた。

V おわりに

本稿は、日本の高校運動部と地域社会の機能的結びつきの実態を把握し、地域における高校運動部の位置づけを明らかにすることを目的に、1) 高校運動部と地域社会がどのような連携・協力関係を構築しているか、2) 高校運動部の存在と活躍が地域社会にどのような精神的・社会的効果をもたらしたか、3) 高校運動部が学校の魅力や地域活性化の手段となりえているかという点について、世羅高校陸上競技部の事例から検討した。上記3点について得られた知見は、以下のようにまとめられる。

まず、1) 高校運動部と地域社会がどのような連携・協力関係を構築しているかという点について、世羅高校陸上競技部のケースでは、陸上競技部への道具的支援を行う者は一部の町民に限られるが、練習の見学や全国高校駅伝のテレビ視聴等を通じて、多数の町民が応援と精神的支援を行っていることが確認できた。また、後援会やOB・OG会、世羅高校国際交流推進会議などの各種組織を通じた経済的支援の仕組みが確立され、それらを通じて町内外から集められた寄付が陸上競技部の活動を支えている実態も明らかとなった。

続いて、2) 高校運動部の存在と活躍が地域社会にどのような精神的・社会的効果をもたらしたかという点について、ほとんどの町民が世羅高校陸上競技部の活躍を認知し、それを誇りに感じたり、そこから精神的活力を得たりしていることが明らかとなった。また、そうした活躍が陸

上競技部に対する支援を継続、充実させる要因となっている可能性も示唆された。

最後に、3) 高校運動部が学校の魅力や地域活性化の手段となりえていくかという点について、世羅高校陸上競技部は知名度向上や入学生確保の観点から世羅高校の魅力の1つとなっており、行政や町民からも今後もその役割を担っていくことが期待されていることが確認できた。また、世羅高校陸上競技部は2010年代以降、世羅町のスポーツツーリズム資源に位置づけられ、スポーツ・観光振興の有効な手段として活用が進んでいることも明らかとなった。

以上から、世羅高校陸上競技部の事例は、高千穂高校剣道部と同様に、特定運動部の活躍と地域社会からの支援が過疎地域の学校の魅力向上と地域活性化の有効な手段となりうることを示したといえる。ただし、世羅高校陸上競技部は町民が練習や大会の様子を直接あるいはメディアを通じて目にする機会が多いことから、高千穂高校剣道部と比べて、応援や精神的支援を行う町民の割合が大きい点に違いがある。また、町行政や観光協会が世羅高校陸上競技部をスポーツツーリズム資源に位置づけ、駅伝やランニングをテーマとした観光・集客交流事業を展開していることも高千穂高校剣道部には看取されなかった点である。

さらに、世羅高校陸上競技部への支援について、2020（令和2）年以降、従来の町ぐるみの支援体制に加え、町外の関係機関等を巻き込んだ支援体制が構築されつつある点が注目される。その1つがOB・OG会が取り組むクラウドファンディング事業であり、もう1つがダイソー女子駅伝部との連携協力である。これらは、世羅町における「駅伝のまちづくり」を世羅高校と町民、町内関係機関の連携・協力による町単位の取組みから、町外機関やファンを巻き込んだ広域的な取組みへと変容させるものであり、筆者は過疎地域における高校運動部の存立と発展、さらに高校運動部を核とした地域活性化の新たなモデルとして、その動向を引き続き注視していきたいと考えている。

以上、本稿を通じて、過疎地域に立地する公立高校運動部と地域社会の機能的結びつきの実態を浮き彫りにした。しかし、高校運動部と地域社会の機能的結びつきの全体像を捉えるためには、都市地域に立地する高校や私立高校、野球やサッカーといった人気種目の運動部なども分析対象とする必要がある。また、高校運動部だけでなく、中学校や大学の運動部を分析対象とすることも考えられる。これらは今後の研究課題としておきたい。

謝辞 本研究の遂行にあたり、世羅高校陸上競技部の岩本真弥前監督および新宅昭二現部長、大工谷秀平現監督をはじめ、世羅町の皆様には聞き取り調査にご協力いただいた。アンケート調査票の配布にあたっては、世羅町役場の協力を得た。県立広島大学人間文化学部の酒川 茂名誉教授からは教育の地理学に関して有益なアドバイスを得た。記して感謝いたします。なお本研究は、2019年度笹川スポーツ研究助成（研究番号 190A1-047）を受けて実施した。また、本研究の骨子は、経済地理学会西南支部例会（2021年10月、オンライン）で発表した。

注

- 1) 過疎地域自立促進特別措置法（2000年）で過疎関係市町村に指定された地域を指す。世羅町は同法が指定する過疎市町村に含まれる。
- 2) Googleで「駅伝のまち」を検索すると、いずれも全国高校駅伝の出場経験をもつ高校の立地する広島県世羅町と秋田県鹿角市、愛知県豊川市、兵庫県西脇市などが上位に表示される

(2021年8月10日検索)。

- 3) 町広報紙「広報せら」に挟み込む形で、世羅町役場から自治会を通じて各世帯に配布した。
- 4) 1968(昭和43)年に広島県立世羅高等学校(現校名)に改称した。
- 5) 学習者が自ら問題を発見し、解決することを重視した能動的学習法。世羅高校では世羅茶復活プロジェクトやせら梨ブランドを守るプロジェクト、耕作放棄地プロジェクトなどが実施されている。
- 6) 世羅高校での聞き取り調査(2019年7月9日)による。
- 7) 注6)と同じ。
- 8) 注6)および、世羅高校を育てる会・広島県立世羅高等学校・世羅町資料「令和2年度世羅高生応援プロジェクト」による。
- 9) 世羅町は、世羅高校の入学人数を2019年の109名から2025年に130名に増加させることを目標に掲げている(広島県世羅町, 2021)。
- 10) 普通科の生徒も専門学科の教科を履修できるようにすることで、学区外の中学校から入学できるようになった。
- 11) 世羅高校陸上競技部の新宅昭二部長からの聞き取り(2019年7月9日)による。
- 12) 前世羅高校陸上競技部監督・現ダイソー女子駅伝部監督の岩本真弥氏からの聞き取り(2021年7月9日)による。
- 13) OB・OG会事務局での聞き取り(2019年6月18日)による。
- 14) 中国高校陸上競技会や全国高校駅伝広島県予選などの公式試合に加え、広島県長距離記録会や織田幹雄記念国際陸上競技大会、春の高校伊那駅伝(長野県)などに毎年参加している。
- 15) 注11)と同じ。
- 16) 注6)と同じ。
- 17) 男子部員は冀北寮(2001年12月増築)、女子部員は優駿寮(2005年4月新築)に入居している。
- 18) 注12)と同じ。
- 19) 中国新聞(2012年11月21日朝刊)による。
- 20) インターネットを介して不特定多数の人々から事業資金を調達する仕組み。
- 21) 中国新聞(2012年6月14日朝刊)による。
- 22) 中国新聞(2012年6月15日朝刊)による。
- 23) 世羅高校陸上競技部の大工谷秀平現監督からの聞き取り(2019年7月9日)による。
- 24) 優勝パレードは警察や自治会、世羅高校などの協力を得て実施される。優勝以外の成績であればパレードは実施されない。
- 25) 中国新聞(2019年10月30日朝刊)による。
- 26) 注12)および注23)と同じ。
- 27) 世羅町観光協会での聞き取り調査(2019年6月18日)による。
- 28) 注12)と同じ。

文献

岩月基洋(2019):常勝によってつくられた「バスケの街」を支えるまちづくりー秋田県能代市の事例ー。松橋崇史・高岡敦史編著『スポーツまちづくりの教科書』58-74。青弓社。

- 岩本真弥 (2016): 『駅伝日本一, 世羅高校に学ぶ「脱管理」のチームづくり』 光文社.
- 川田 力 (1994): 社会地理学と教育社会学の接点—教育と社会階層・地域格差の再生産論をめぐって—. 人文地理 46: 187-202.
- 神田敬州 (2020): TOP TO RUN! 高校駅伝のルーツ世羅高校駅伝必勝プロジェクト.
<https://readyfor.jp/projects/sera-ekiden> (最終閲覧日: 2021年6月18日)
- 小粥俊輔 (2017): 人口減少社会を見据えた県立高校の「魅力づくり」に関する研究—地域との連携による高校改革に着目して—. 日本高校教育学会年報 24: 4-13.
- 斎藤 毅 (1975): 地域教育政策論に関する方法論的一考察—教育学への文化地理学的アプローチ—. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編 27: 75-86.
- 酒川 茂 (1998): 教育問題を対象とする地理学からのアプローチ. 地理科学 53: 191-199.
- 酒川 茂 (2004): 『地域社会における学校の拠点性』 古今書院.
- 新堀通也編 (1973): 『日本の教育地図 県別教育診断の試み—体育・スポーツ編』 帝国地方行政学会.
- 新畑茂充 (1982): 『世羅高校駅伝史—汗と涙のイダ天讃歌—』 広島県立世羅高等学校同窓会.
- 樋田大二郎・樋田有一郎 (2018): 『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト—地域人材育成の教育社会学—』 明石書店.
- 樋田有一郎 (2016): 人口減少時代の地方郡部の高校教育の変化—学校知の変化と魅力化 (学校) コーディネーター制度に着目して—. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 24: 81-92.
- 広島県世羅町 (2017): 『世羅町観光振興基本計画』.
- 広島県世羅町 (2020): 統計データブック (2020年12月),
<https://www.town.sera.hiroshima.jp/uploaded/attachment/3402.pdf> (最終閲覧日: 2021年6月22日)
- 広島県世羅町 (2021): 世羅町人口ビジョン及び世羅町第2次まち・ひと・しごと創生総合戦略,
<https://www.town.sera.hiroshima.jp/uploaded/attachment/3162.pdf> (最終閲覧日: 2021年8月11日)
- 広島県立世羅高等学校 (2019): 『令和元年度 学校要覧 TOP RUN 世羅』.
- 広島県立世羅高等学校 (2020): 世羅町, 広島県立世羅高等学校, 株式会社大創産業 (DAISO) のスポーツ (駅伝) 分野における連携協力に関する協定書調印式.
<http://www.sera-h.hiroshima-c.ed.jp/pdf/news20200807.pdf> (最終閲覧日: 2021年6月20日)
- 宮口侗迪・池 俊介・山本隆太 (2014): 過疎地域における高校の存在意義について. 早稲田教育評論 28: 43-67.
- 和田 崇 (2020): 過疎地域における高校スポーツの存立基盤と地域コミュニティに与える影響に関する研究. 2019年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書: 66-72.
- 和田 崇 (2021): 過疎地域における高校運動部の位置づけ—高千穂高校剣道部の事例—. 地理学評論 94: 364-380.
- Bale, J. (2003): *Sports geography*, 2nd ed. London: Routledge.
- McGowin, D. (2010): Sports, geography of. In *Encyclopedia of Geography* 5, ed. B. Walf, 2680-2682, SAGE.
- Rooney, J. F. (1974): *A geography of American sport: From Cabin Creek to Anaheim*. Addition-Wesley publishing company.
- Rooney, J. F. and Pillsbury, R. (1992): *Atlas of American sport*. Macmillan publishing company.